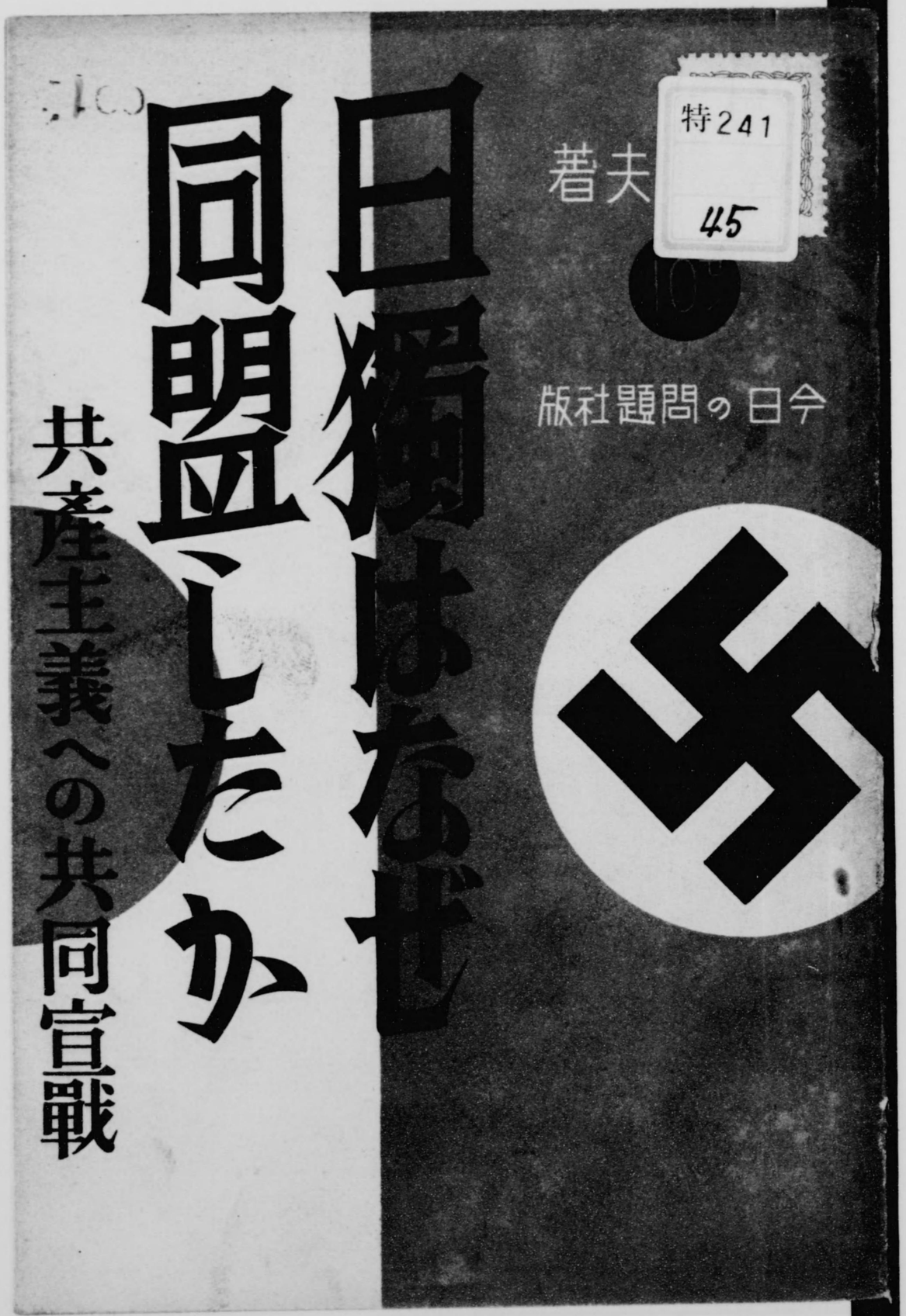

2

0010431000

0010431-000

特２４１－４５

日独はなぜ同盟したか

三島康夫・著

今日の問題社

昭和１１

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

特241
46

目次

一、日獨協定遂に成立す……（三）
二、共産主義脅威の發生……（四）
三、赤化は如何に進展したか……（九）
四、赤化脅威の躍進……（一四）
五、日本とドイツの場合……（一九）
六、防共協定の意義と限界……（二四）
七、ソ聯への波動……（二七）
八、支那に與へる影響……（三〇）
九、歐米諸國へどう響くか……（三三）
一〇、協定の利害と將來……（三四）
一一、協定は國際政局の樞軸……（三七）

日獨はなぜ同盟したか

三島康夫

一、日獨協定遂に成立す

日獨協定は遂に成立した。われ〳〵は遂に來るべきものが來たと云ふ事をはつきりと感ずる。それは、國内政治の動向と國際外交界の大勢とから必然であつたといふことである。日獨防共協定は、たしかに日本外交史に一大轉機を劃する一大外交的事實である。何故ならば、日獨協定は日本の國際生活における今後の行路に對して、一つのはつきりした進路を確定したものだからである。つまり、世界における日本の地位立場、歐米の諸强國は勿論、世界の各國に

對する日本の關係を明瞭に示したことになるのである。

それゆゑ、日獨協定に就ては語るべきことも頗る多い。が、僅かな紙數でそれを盡すことは到底不可能であるから、日獨協定の必然性と、日獨協定が成立した結果、日本の今後は何うなるか、といふ最も重大な二點に就て概記するに止めやう。

二、共産主義脅威の發生

赤化卽ち共産主義の脅威は、赤色ソヴエート政權の樹立に依つて發生したのである。

歐洲大戰の第三年目、一九一七年の三月、一九一四年夏以來イギリス、フランスと共に聯合國として手を取り合つてドイツと大戰を交へて居たロシアに社會革命が勃發した。さうしてケレンスキーを首班とする革命政府が出來たが、彼等一派は穩和社會黨であつたため、その民主主義的政治は、底の底から搖り動かして來た革命の激動を抑へることが出來なかつた。

勞働者、農民等の下層階級の烈しい意志は過去の政治に對して抱いて居た限りない反逆の感情と共に、彼等自身の直接の政治を要求し、生溫るいケレンスキー一派を指して裏切り者とさへ呼んだ。

その結果、その年の十一月、レーニン一派の多數派（過激派）社會黨の共産主義を標榜した革命が成就して、赤色勞農（ソヴエート）政權が樹立された。それが現在のソ聯政權である。

之を見た歐洲は愕然色を失つたのである。何故ならば、今が今まで、彼等の國家の基本體制である資本主義的國家の發展のためにこそ、償ひ得ない犧牲を拂つて大戰を戰つてゐたその一翼が、卒然として共産主義國として出現したからである。然もそれは版圖に於て世界の六分の一、人口に於て約八パーセントの容量の大國である。大戰で疲弊し困憊した諸國に取つては底の知れない脅威であつたのである。

加ふるにレーニンの勞農政權は、英、佛を始め歐洲の參戰諸國に對して卽時休戰を提議し、單獨不講和を約束した。一九一四年の倫敦宣言を無視して、同年十二月、ブレスト・リトウスクでドイツと單獨に休戰條約を締結したのである。

これは東方戰線（ロシアに對する正面）から西部戰線（英、佛、白等の正面）へ、ドイツがその軍隊を移動することを得せしめたもので、聯合國に取つては二重の脅威であつた。

かくして一瞬にして味方が敵となつたのである。そこで赤色脅威の潰滅が聯合國に依つて企圖されたのである。聯合國の赤色政權武力討伐時代が是れであり、ソヴエート政權の所謂國內

戰時代が是れである。一九一七年末から一九二〇年までの三年餘の間である。

勞農革命によつて赤色政權が樹立されるや、舊帝政時代の將軍連に依つて、各地に反革命軍たる白衞軍が結成され、各地に白色政權を名乘つて次第に赤色分子と戰ひつゝ、モスクワ、レニングラードに迫らんとした。一大敵國の出現に驚愕した英、佛等の聯合國は乏しい軍隊を割いて各地の白衞軍を援助した。ソヴエート史家の記錄によると、一九一八年の八月には、是等の白色政權が十九もあつたといふことである。

ところが。之等の白衞軍は一時赤軍をモスクワに追詰めるかと思はれる所まで進んだのであるが、赤軍の反擊に會してその後漸次各地に敗れ、間もなく消滅してロシア境外に逃れ去つたのである。

その理由は、第一に赤衞軍が急拵へながら、その革命の熱情を以て死力を盡して戰つたこと第二に白衞軍はそれ〴〵勝手な主張、政治綱領を有つて居た爲めに、彼等相互に反目して何等統一的行動を取り得なかつたこと、第三に之を援助した聯合國の間に暗鬪があつたこと。即ち主としてイギリスとフランスとが各自の利害から、西部戰線における樣な緊密な連絡を取り得なかつたこと、の三點にあつた。

殊に一九一八年の秋、ドイツ軍が崩壞して休戰となつてからは、フランスは依然としてドイツを永久に抑へやうとする意思の下に、イギリスは反對に恐らく遽かに强大となつてイギリスの競爭國となるであらうフランスを寧ろ抑へやうとする希望の下に、全く相反した立場を取り更に白衞軍の援助に對して各自の利益をそこに求めやうとする露骨な態度を示し合ふ樣になつて、勢ひ援助も徹底せず、連絡も不十分となつたのである。

さうして、大體に於て赤色政權が安定し、再び世界の六分の一をその版圖として兎も角も支配する樣になると共に、歐洲の參戰諸國は自身の足元の問題、講和條約の基礎、戰爭に依つて惹き起された莫大な損失補償、疲憊の復興、即ち自國の建て直しと安定との問題に吸收されて赤色政權に對する干涉の問題を一擲して了つたのである。かくして赤色政權が確立されその赤化の脅威が世界に根を下ろしたのである。

私は茲でその以後に於ける赤色外交史の概略をすらも述べる餘地を持たない故に、次の二つの事實を記すに止める。

その一はチェツク軍援助である。

大戰中獨墺兩國內の少數民族として獨墺側戰線に立つたチェツク人等は、戰意薄く聯合側に

俘虜となるものが多かつた。彼等の多くは獨墺の羈絆から脱して獨立國を建設せんとする希望を抱き、私かにその運動を起した。之を見た聯合側は聯合側に立つて獨墺軍と戰ふことを條件としてその獨立を保障し、同時にその中ロシアに在つた約一萬をシベリア鐵道經由で西部戰線へ廻送することにした。

ころが恰もロシアに革命が起つた結果、彼等は白衞軍と共同して赤色軍と戰ふことゝなつたのである。之が聯合國のチェツク軍援助となり、シベリア出兵の最初の動機となつたのであり、さうした講和會議に於て認められた獨立國チェツコ・スロヴアキアとなつたのである。

その二はドイツの革命である。

ブレストリトウスクで單獨講和を結んだドイツは、その敗戰に依つて革命的機運が激發され社會黨の共和政權が樹立されカイザーの帝政が覆へされ、共産主義こそ容認しなかつたが、最つ先に赤色ロシアと握手をすることゝなつたのである。

ブレスト・リトウスクの休戰條約に次で翌年三月同所で講和條約を結び赤色ロシアを正式に承認し、通商條約をも締結したドイツは、一九二二年改めてラツパロ條約を締結してソ聯を全的に再確認したのである。

爾來十八年を經過した今日、そのドイツが赤色脅威に對して敢然起ち、チェツコは寧ろその軍事的援助を受け、フランスは之を友邦として迎へ、イギリス又必ずしも之を敵視して居ないのである。

三、赤化は如何に進展したか

聯合國が赤色ロシアに對して武力干渉を試み、最初に革命を起したドイツさへも、共産主義化に反對して極左派に彈壓を加へ、後にスパルタクース團（極左武裝團體）員を逮捕し、巨頭リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグ等を投獄（後死刑に處した）したりしたのも畢竟、赤色ロシアの各國赤化運動が明かに認められたからに外ならない。

革命に成功したロシアのボルシエヴイキーは、ロシアにおけるこの成功を一擧にして歐洲全土に及ぼさうと謀つた。それは四年に亘る大戰で歐洲全土が疲弊し、然も平和の來復に依つて、一種の放心狀態に在つた所から、之を千載一遇の好機であるとしたからである。

そこでロシアで成功した樣な純粋の共産主義革命を主張する新なる國際的革命黨を創設し、その力に依つて歐洲次で全世界を共産主義革命に導くことを決意し、一九一九年一月、ロシア

共産黨の名で各國の極左社會主義者に第三インターナショナル創立大會の招請狀を發し、三月三十ケ國の代表五十一名がモスクワに參集して第三インテル創設の宣言を發したのである。是等の代表は一九一四年第二インターナショナルが日頃の主張を食んで參戰を承したため、之を脱退し一九一五年スイスのチンメルツルトに別個の國際社會黨を樹立した。所謂チンメルツルト派である。

第三インテルは共産インターナショナル、即ち國際共産黨であつて略してコミンテルンと呼ばれるものである。之を第三インテルと呼ぶのは第一及び第二インターナショナルと區別しての名稱である。

ところで此の第三インテルは各國共産革命の動力となるものであるが、既に革命を成就したロシアは黨員の約九割を擁し、且つ現にロシア中央政府を自ら組織して居るのであるから、當然にロシアがその本據たり、その祖國となつたのである。ソヴエート聯邦が、自ら世界のプロレタリアートの祖國であると誇稱して世界無産階級に革命を呼びかけて居る事實、同時にソヴエート聯邦とコミンテルンとが一心同體である事實とは、かくして疑ひを挾む餘地のないものとして認められて來たのである。

さうして赤禍は、ロシアを中心として、凡ゆる形態を取つて放射せられることゝなつたのであるが、その間、彼等は革命といふ異常に困難な仕事を成し遂げつゝ、國際生活の中に自ら生きなければならなかつた結果として、漸次列國に對して表面妥協的な方針を採る樣になり、特に國際聯盟の一員となつて、大國並に取扱はれる樣になつてからは、相手國の國體を破壞する敵國的態度に就ては嚴重にカムフラージュしなければならなかつたのである。ソ聯とコミンテルンとの謎の樣な關係は茲から生れたのである。

然し赤禍は常に存在して居たのである。過去十八年間に於ける赤禍に就ては、大體三段に分けて觀察することが便宜である。

第一段は、驀進時代とも云ふべく、ロシア革命成功の餘勢を驅つて一氣に世界に擴大すべく四方へ猪突猛進した時代で、大體一九二三年頃までゞある。

ドイツでは敗戰の結果社會革命が起つた。既にその機運の動いて居た所へ、ロシア革命の成功の事實があり、更にコミンテルンの急激な宣傳煽動があつた結果、遂に成功したのである。併し茲では間もなく社會民主々義が勝利を占めて、共産黨は放逐された。

ハンガリーでは一時ソヴエート政權が樹立された。一九一九年三月のことであつた。然しこ

れも結局物にならなかつた。

イタリアでは一九二〇年八月、北部の諸工場が共産黨員に依つて占領され、正に共産革命成るかの形勢となつたが、ムツソリーニ一派のフアシスト黨のローマ進軍に依つて抑へられて了つた。茲ではその後も絶えず共産派の革命陰謀が企てられ、フアシスト黨の獨裁に對する反感が一時昂つた一九二三年には、右派社會黨、民主主義者等とも一所になつて大規模な革命陰謀を行つた。

同様に、英、佛等の諸國に對してもコミンテルンの手を通じて社會革命の陰謀を廻らすと共に、邊境の諸小邦、並に遅れた民族に對しても解放と救濟を名として、共産主義の勢力を侵入させた。中央アジアに於けるヒワ、ボハラ兩國をソヴエート化し、外蒙を掌中にした如きはその成功の一班であつた。

第二段は、彼等の所謂平和外交時代で、謂はゞ、國内整備時代、對外活動の萎縮時代であつた。大體一九二四年から二七年頃までゞある。

ソ聯は此の時代から、ソ聯邦としては世界赤化に干與せず只管資本主義諸國との友好を求めると云ふ態度を示し、赤化工作は之をコミンテルンにやらせるといふ建前を取つた。當時國内

では封建的資本制から一擧に共産主義に移行する經濟的、社會的、心理的不可能が感得され、理論的退却を開始した時代で、新經濟政策、新に經濟政策と呼ばれる資本主義の一部容認列國資本主義との妥協が方針として採られた時代、更に黨内、國内に於て、トロツキー、ジノヴイエフ等コミンテルンの創唱者と、スターリン一派の修正派現實派との抗爭が行はれた時代であつた。

從つて一方に於ては英、伊を始め、日本、支那とも國交樹立の基本條約を締結し、正式承認を獲得すると共に、他方に於ては依然として政府とは無關係のコミンテルンの名に於て赤禍問題を隨處に惹起して居た。

一九二五年フランスに於て在佛大使館一等書記官ヴオーリンがコミンテルンの一員として赤色革命の陰謀を企圖し、次で二七年には大使ラコフスキーが同じくコミンテルンの一員として、フランス赤化工作に參加した故を以て退去を命ぜられた事件があつた。

又イギリスでは、ジノヴイエフがイギリス共産黨に與へたと云ふ英國赤化革命指令書が問題となり、遂に保守黨内閣の成立に依つて、對露斷交が行はれた。

此の期間に於けるソヴエートの大きな成功は支那に於て擧げられた。孫文が一九二三年廣東

政府を樹立するや、招かれて指導員となつたボロヂンは滞在數年の間に遺憾なく支那赤化の工作を施した。國民革命軍の創設、中國共産黨の創設、共産主義の理論に基く革命工作の實施等一時は南支を全くソヴエート化した。蔣介石の清黨運動に依つて共産黨を國民黨外に放逐したけれども、今日中國共産黨として、また紅軍として、西北邊境に蟠居して居る共産軍は依然として、支那に於ける一大勢力であり、中央支那政府の一大脅威であると共に、日本の北支地位に對する脅威ともなつて居る。

その禍根は實に一九二三年から一九二七年頃に至る此の『平和時代』に植ゑ付けられたのである。

四、赤化脅威の躍進

前五年間に妥協政策を取つたソ聯は國内稍安定することを得た。

その間政權の維持確立を目的として邁進して來たスターリン一派の現幹部派は、反對派に大彈壓を加へると共に、一大英斷的躍進政策に向つて一歩を進めた。第一次、第二次の五ヶ年計畫がそれである。

ソ聯の二次に亘る五年計畫は言ふ迄もなく國家の基礎力を擴大增大するものであるが、それは單に經濟力ばかりでなく、武力をも著るしく增大せしめた。

それはソ聯の當局者が凡ゆる機會に明言して居る樣に、明白に武力の增大を目的として居るのであつて、その理由は次の二點から出發して居る。

第一、世界の帝國主義國は何れは第二次大戰を戰ふことが不可避である。

第二、これは世界プロレタリアートの祖國であるソ聯が一擧に帝國主義諸國を擊滅する最初にして最後の機會である。

つまり世界を相手として戰ふ意氣込みで武力の躍進を圖つて居るのである。換言すれば從來國際共産黨の手を通じて各國内の共産黨を動かさんとする手段、或は弱小國に對しては自ら武力を下し又は革命派に援助を與へてソヴエート化する手段を取つて來たに過ぎなかつたのであるが、五年計畫の進行に伴ふ武力戰準備が整備するに從つて、赤化的進出を第一期の驀進に代ふるに、計畫的準備的武力躍進時代たらしめんとするに至つたのである。これ一九二八年以後に於ける動向である

從つて此の時代に於ける赤化は、コミンテルンの單なる思想的宣傳、乃至は社會的革命の誘

導といふ下からの內崩を企圖する以外に、世界の國際情勢を大きく利用し、ソ聯邦の國際的地位をその間に巧に介在せしめて、上から國家全體へ壓力を加へてその目的を達せんとするに强力手段にまで進展したのである。

卽ちソ聯の國際的地位の進展に依つて、その影の形に添ふが如くに存在せしめて居たコミンテルン利用の共產化政策がその態樣を一變したものである。

最近における國際情勢は二個の現狀打破運動と之に對抗する運動とに依つて動かされて居るといふ事が出來るが、その一は實にソ聯の進出で、他はヴェルサイユ體制の崩壞である。

ソ聯邦は國家成立の機轉に於て、國際生活運營の目的に於て、屢々記した樣に旣存諸國家と氷炭相容れぬ本質を有つて居る。唯終極の目的の爲めに、國力の充實の爲めに、便宜妥協的政策を採用して旣存諸國家と對等平和の生活を共同して居るのである。それ故、彼が妥協に終始して居る限り、從つてその國家の本質を露呈しない限り、之を妥協することの可能なる諸國家に取つては直ちに危險を意味する存在ではない。

そこにソ聯がその本質にも拘らず平然として彼が倒さんと欲して居る資本主義諸國、英、佛等と腕を組み膝を交へて居ることが出來る理由がある。

ヴェルサイユの講和條約に依つて、歐洲大戰の責任を負はされた諸國、ドイツ、オーストリア、ハンガリー等の諸國は、ヴェルサイユ條約の存する限り、それに規定された條件の續く限り國民的生存すらも不可能であることを感じた。況んや成長すべき約束の下に在る人間の集團としての希望は遂に實現され得ないことを痛感した。

從つて彼等は國民的本能の赴く所、ヴェルサイユ條約中のより過重なる條件から順次に之を破棄して來た。さうして遂に國民的發展の基礎條件として自主軍備、卽ち再軍備を宣言し、相次いで整備を實現した。

之には折角大戰に於て勝利側に立ち乍ら十分なる獅子の分け前に與らなかつたイタリアの如き國が、戰敗國同樣の困難な立場に置かれた結果として、同じくヴェルサイユ條約の破棄乃至は修正に味方した。

日本と支那との關係も一面に於ては此の性質を帶びて居る。唯日本の場合は日本が有して居た現狀を反對に支那の革命的政策に依つて縮減されやうとして反撥したのである。從つて他面に於てそのまゝソヴエート的攻勢に對する防衞でもあつた。

ところが、かうした世界の狀勢は、最後の判斷の基礎に於ては、國體なり國家成立の理想な

りと云ふものからは全く離れた、過去何千年かの間闘はれて來た動物本能的『國家の生存競爭』なる一點から考へられることゝなつたのである。言ひ換へれば、革命の危險より戰爭の危險の方が、より切實なより焦眉な問題として映じて來たのである。

フランスに取つては、曾ては大使を追ひ返へしたその同じソ聯の迫力の强化は、フランス自身へ迫るものではなくしてドイツの背後を脅やかし、フランスの正面を緩解する一の魅力として見えたのである。さうして赤色と眞反對の黑色ドイツの再軍備の方が遙かに不安危險な現象となつたのである。勿論之にはフランスが社會黨の政府に依つて支配されて居る國家であることにもよるのであるが、假にフランスがファシストの國家であつたとしても、曾てドイツから取り上げた佛領を欲して居るドイツよりは脅威の間接なソ聯と手を握るであらうことは言ふまでもない。

かやうにして、國際情勢の全般的な觀察に於ては赤色脅威は、國家勢力競爭の脅威の中へ吸收された觀がある。

だが然しそれは全面的事實ではない。

何故ならば、それはフランスの如き僚友的立場に於て見ることを得る國に取つてはさうであ

るが、反對に想定敵の立場に於て見る時は、脅威は二重になる。卽ち一は國家勢力の從つて自國に迫る壓力の增大として、二はかゝる强大勢力を以てする共產化の脅威の增大として働くからである。

スペインの場合を想定して見やう。

若しソ聯が五年計畫實施以前の武力段階にあつたなら、スペインに對する支援も、聲援と金と物資以外に出でないであらうし、先般程問題が爭はれることもなかつたらう。それが一流の軍備國となつた結果として武器と指揮官とが送られたと爲す現在の狀勢となつたのである。

約言すれば、所謂赤禍は此の第三階級に至つて、本來の赤化と國際的勢力禍との二重の意義を持つに至つたのである。

五、日本とドイツの場合

日本とドイツの場合に於ては、かゝる二重の脅威が顯著であつたと言へる。

滿洲事變の直前に於ては、赤禍は、日本經濟の恐慌現象の中に、日本共產黨、再建共產黨等等の變革企圖と、之に對抗するかの如き極右的變革企圖すらも噂され、一時は日本社會に恟々

たる不安を醸し出させて居た。

同時に廣東國民政府に指導員を招いた支那は、廣東派の北伐進展と共に、凡ゆる失權の回復を目指す國民革命外交を振り翳して、日本の僅かな權益を脅威した。さうして、東三省の實力者張學良が日本權益の實力的破棄を企圖し、之を斷行するに至つて遂に滿洲事變を勃發せしめた。是等の事情は既にわれ〳〵の普く知る所である。

此の場合、前者はコミンテルンの見えざる手を通じて直接日本に差し向けられた革命の射彈であつたが、後者はコミンテルン並にモスコー政府の明白なる指導に基く所の、支那を通つた間接射擊乃至は跳彈の危險であつた。

だが、滿洲事變は事態を一變した。殊に、滿洲國成立後における北錢の讓渡は、眼に見える手を境内から拂ひ除けたのではあるが、同時に、見えざる手はそのまゝとして、改めてソ聯の國際勢力と滿蘇國境に於て直面相對することゝなつたのである。即ち曾ては殆んど感知しなかつた第二の脅威を感ずるに至つたのである。滿ソ國境を扶む不安なる狀勢はこれに外ならない。

加ふるに彼が支那に殘した中國共産黨とその赤軍とは、忽ちにして滿洲朝鮮に對する脅威となつた。今日僅かに北支の特殊事情に依つて薄い障壁を築いて居るに過ぎない。

支那の西北邊境に巣喰ふ支那共産黨は、先般來漸次移動して綏遠方面に向つて居た。外蒙はソヴェート聯邦がその赤化工作に依つて支那から剝奪したソ聯内の一邦である。兩省の共同協力は餘りにも當然であり、内蒙から北支滿洲に及ぶ脅威も自明の理である。現に滿洲國に於ける中國共産黨、朝鮮共産黨は絶えずコミンテルン及び中國共産黨の中央部から指令を受けて、凡ゆる地下工作を行つて居るのである。

さうしてかゝる赤禍の一般狀勢が最近一兩年來頓に活潑となつて來たことを見受けるのである。紅軍の内蒙方面への移動、昨年暮以來形成された紅軍と國民黨との抗日聯合戰線と躍動はそれである。然してそれが昨夏の第七回コミンテルン大會の決議に基く新戰術の現はれであることは夙に周知のことゝ思ふが、その要旨を掲げれば次の如くである。

第一、ファシズム、國民主義の勃興に對して聯合人民戰線を形成して攻勢を取る。

第二、從來寧ろ敵視して居た第二インターナショナルは勿論、ブルジョア民主々義とも妥協する。

第三、日本、ドイツ、波蘭を當面の目標とし、日本に對しては中國共産黨を支援し、之をして蔣介石政權との聯合人民戰線を結成せしめて日本に向はしめる。

卽ち、日、獨、波三國に對して新なる攻勢を展開したものである。日本が之に對する防衛策を講じたのは當然であり、同時にコミンテルンが國際黨である必然の結果として日本の防共が國際協定として現はれて來たのも亦當然である。

コミンテルンによつて日本同樣、新攻勢の對象として擧げられたドイツの場合も同樣である。赤禍の發生の項に於て一言した樣な狀勢の後に於ても、ドイツ共產黨は常に少數黨として存在し、社會民主黨及びその他の凡ゆる右黨並に國民に對して、烈しい鬪爭を續けて來た。從つてナチ黨の出現以來は、共產黨の武裝黨員とナチの突擊隊員とはしば〳〵流血の鬪爭を繰返へして居た。

然るにナチの執權が實現するや、ナチ政府は共產黨を徹底的に彈壓し、それを素因としてドイツとソ聯とが一時國交を緊張せしめた程であつた。

ところへ、第七回共產黨大會が日本と共にドイツをその目標として攻勢の的とした結果、今夏のナチ黨大會では、大幹部が擧つて共產黨とソ聯邦とを徹底的に反擊した。さうして再び國交斷絕の危機さへも見えたのであるが、僅かに破綻を免かれた樣な事情であつた。

かくして日本とドイツとは同じ目的、同じ必要に促されて國際共產黨の破壞工作に對する共

同の防衛を約束したのである。

ナチ黨の人々は、既にその政權を執る以前に於て、日本大使館員或は在留武官等に對してコミンテルンの世界各國に對する破壞工作に就て協力することの必要を論じて居たのであり、日本に於てもコミンテルンに關する限り同樣な感想を抱いて居たものが尠くなかつたのである。

然しそれが一個の國際協定となる爲めには一層切實なる理由がなければ、それは徒らに國際外交場裡に疑惑を撒き散らす惧れも多分にあつた爲め、容易に具體化しなかつたのであるが、昨夏の前記國共の決議は恰も日、獨二國を並べて破壞の目標に選んだ結果、玆に急速に日獨間に共同防共の感情が誘發せられることゝなり、かくして、防共は日獨二國間に於て昨秋頃から眞面目な話として、兩國當事者間の重要な話題となり、今夏以來、武者小路駐獨大使とリツベントロツプ駐英大使との間の正式外交々涉に移され、十月十七日ベルリンに於て假調印を爲し十一月二十五日御裁可と同時にベルリンに於て正式の調印を見るに至つたのである。

去れば日獨兩國を驅つて共同防共に赴かしめたものはコミンテルンそのものであるといふことが出來る。

六、防共協定の意義と限界

日獨協定は、國際共産黨の目的が凡ゆる手段に依つて現存國家の破壞及び暴壓に在ることを認め、それがそれ〴〵の國家の安寧に關するばかりでなく世界の平和に對する脅威であることを確信した上で、

第一に、コミンテルンの活動に付て、(イ)相互に通報し、(ロ)必要なる防衛措置に付協議し、(ハ)緊密なる協力に依つて右措置を達成せんとするものであり。

第二に、同樣の脅威を感ずる國に對して、(イ)本協定と同樣の防衛措置を執るか、又は(ロ)本協定に參加せんことを共同で勸誘せんとするものであり。

第三に、調印の日即ち一九三六年十一月二十五日から效力を發生し、期限は滿五ケ年と定めたものである。

而してその附屬議定書に於ては

(一)、(イ)コミンテルンの活動に關する情報の交換、(ロ)コミンテルンに對する啓發、(ハ)及ひ防衛の措置に就て緊密に協力し、

(二)、國內又は國外に於て直接たると間接たるとを問はずコミンテルンの勤務に服し又はその破壞工作を助長するものに對しては、兩國官憲は現行法の範圍內で嚴格なる措置を執り

(三)、當該官憲の諸般の協力を容易ならしめるために常設委員會を設置し、そこで考究協議することを約したのである。

即ち協定の對象はコミンテルンであり、目的はその破壞工作に對する防衛であることが明かであり、その防衛を共同とした理由はその禍根が國際的存在であるが故に、可成的廣汎なる範圍に亘つてその活動を阻絕せんとの趣旨に出でたものであることが明かである。

然して、附屬議定書に定めてある通り、之に對する適用法規はわが國に於ては當然に治安維持法であり、從つて司法官並に警察官が防衛、處斷の措置に任ずる譯である。

然し乍らわれ〴〵は何等軍事協定を伴はざる本協定に於ても、或る場合即ち×力的赤化の場合には、武力を須ゐざるを得ざることのあるは當然であらう。

蓋し中國共産黨の北支、滿洲方面に出現した場合の想定がそれである。何故ならば、中國共産黨並に共産軍は、南京中央政權が、之をその建制內の黨派なり部隊なりと認めない限り、明白にコミンテルン直屬の國際共産軍と言ふべきであり、又蔣氏がその建制內の部隊なりと認め

たる場合には、南京政權は共産軍を使用したものとして認められ、從つて支那政府を對象とすると同時に、該共産軍を對象として武力を行使せざるを得ないであらうからである。

然してそれは獨り支那に限らないこと勿論であると云はなければならない。

次に此の協定は、何等政治的意義を有するものではないと。卽ち對象は國際共産黨であつて他の特定の何國でもないこと、從つて例へばソ聯を目標としたものではないといふことである。換言すれば、國際共産黨本部を策源地とする世界共産化なる一個の世界的事實に對して、之に脅威を感ずる世界の二國が、之に對抗する爲めの精神的支撐點を初めて得た、といふことである。

と同時に、これは何等國家體制に對して制限束縛を加へるものではないのである。偶々ドイツがナチの國であり、日本が今現實に特殊な政治狀勢にある結果、それが協定の成立にあつて力あつたかも知れないし、それを以て日本政治情勢の物差しと爲し得るかも知れないが、然もそれを以て將來日本をファシスト國として規制するものであるといふ事は言へないのである。

協定は防共それ自體に局限されたものであつて、それ以外の何ものでもない。

然らば協定の將來とその利害得失如何といふに、それには先づ本協定が列國に與へるであら

う影響を考察する事が先決である。

七、ソ聯への波動

日獨協定の成立に震撼した第一はソ聯である。それはソ聯とコミンテルンとの關係及びソ聯自身の從來日本及びドイツに對して執つて來た言動の故である。

ソ聯とコミンテルンとの關係は前にも一言した如くわれ〳〵としては不可分としか觀られない實情に在る。

然るにソ聯當局は從來常に事ある毎に次の如く主張して來た。卽ち、コミンテルンとソヴェート聯邦政府とは全然別個の存在である。故にコミンテルンの何等の行動に對して責任を負ふことは出來ない、と。而してこれは獨り日本に對してのみならず、世界の各國に對して苟も赤化問題が起る度毎に判で押した樣に繰返されて來た所である。

果してさうであるとすれば、ソ聯政府當局にしても、在京使臣にしても、日獨協定はコミンテルンの活動が對象である、その日本政府の言明に依つて充分滿足し安堵すべきものであつて之を對ソ同盟として宣傳を爲す必要は毛頭ない譯である。

然るに、事實に於て、ソ聯は防共協定に依つて異常な衝動を受け、日本に對して直ちに反擊的姿勢を示したのである。第一に明年一月から軍備を大增勢すると發表した。第二に十一月二十日調印を爲す豫定であつた漁業條約の調印を延期すると申出でた。更に新聞電報を以て既に調印を了した北樺太の石油協定を破棄するかも知れないと傳へて來た。

若しソ聯が自らソ聯とコミンテルンとを混同して居るのではないとすれば、理由なきいやがらせと云はざるを得ない。が反對に、眞實衝動を受け脅威を感じての反感が露骨に現はされたものとすれば、それは、ソ聯政府とコミンテルンとの不可分關係を自供したものであると斷ぜざるを得ない。

之は明かにソ聯の矛盾である。

然し乍ら、われ〳〵は姑らくその間の消息を追及しないとして、ソ聯に對して甚だ遺憾なる事實を見るのである。

それは第一にソ聯政府の有力な巨頭が現に國際共產黨員であることであり、國際共產黨の唯一最高の指導者が明かにソ聯政治を左右しつゝあることであり、近來彼が政治の表面に現はれて來てゐることである。

第二に、國際共產黨の本部がモスクワに在り、そこに大會が開かれ、その一切の行動がモスクワ政府に依つて、保護せられ、監視せられ、裨益を受け便宜を供與されて居る事實である。

是等は若しソ聯と各國との國交を規定した基本條約の趣旨から言へば、明白に悖信の行動であると云はなければならない。

さうして現はれる事實は洵によくソ聯とコミンテルンとの言動が一致して居る事實である。モスクワ政府の軍事首腦者が歐亞二正面主義を高調し、歐洲に於てドイツ、アジアに於て日本を、ソ聯に挑戰せんとする二國であると端的に表明するや、コミンテルンの大會は僅かに之にポーランドを加へただけの全く同一の攻擊計畫を策定した。

かくしてわれ〳〵はそれが單なる防共協定であるにも拘らず、ソ聯が異常なる衝動を受けたといふ事に對して別段不思議に思はない。いな、ソ聯がいやがらせをやるであらうこと、或はそれ以上の何等かの報復的な手段を弄するのではないかとさへ思ふのである。然し同時に、ソ聯は確かに若干の脅威を感じたであらう。從つて何時までもいやがらせを續けて日本を激發せしめる樣なことはないであらう。

八、支那に與へる影響

最も大きな衝動を受けた第二の國は支那である。

支那に對してはかねて廣田外相の時代かの所謂三原則の一として共同防共を提議してある。然るに支那は、それと同時に國交の根本的調整も可能であると思はれた廣田三原則をさへ蹴つて、剩つさへ抗日聯合戰線を結成し、暴行沙汰を頻發せしめた。

そこへ頃合ひを見はからつたかの樣に出現した日獨協定である。

南京政府は聲明を發して、防共には自信がある、お世話にはなりませぬ、と言つた。現在容共、共産黨と協力して居る支那としてはさう言ふより他に方法はないであらう。然し、今日までの蔣介石政權の日本に對する相當頑强な態度から見て、假りに支那に對するソ聯の迫力に若干の退潮があるとしても、彼が日本へ歩み寄るかどうかは頗る疑問である。防共協定の武力的防策の適用を受けるところがありとすれば、現在のスペインと、支那の共産軍とであらう。從つて支那は日獨協定を最も切實に考査すべき立場に在る。

何れにしても事は重大で、支那と雖も立所に名案も浮ばないであらうから、先づ歐米各國の

動向と、協定の成行を靜觀した上で何分の對策を講ずるであらう。

九、歐米諸國へどう響くか

歐洲に於て心臟を衝かれたのはフランスである。日本とフランスとは所謂友好關係に在つた。佛ソ相互援助條約にしても極東を除外してあつた。然るにその日本が宿敵、然して最近頓にフランスに對立して來たドイツと防共協定を締結したといふことは、青天の霹靂であつたに違ひない。

冷靜に見て、協定がフランスに事の意外と、日本に對する多少の不快な感とを與へた事を否定し得ない。

假りにそれが防共卽ちコミンテルン對象であるとしても、恐らくフランスはコミンテルンが何ものであり、フランスはソ聯と相互援助條約まで結んでドイツの腹背兩面に於て控制して居る國であるから、日獨協定に依つて遠來から精神的支援を得たと思ふドイツを見れば、協定に對抗的の工作を考案するであらうことは想像に難くない。

恐らく、小協商の補强を更に力め、イタリア、ポーランドその他の諸國が之に參加すること

を防止する外交手段を極力講ずるであらう。さうしてイギリスを誘うであらう。

その點はイギリスも同樣である。タイムスが日本の南支に及ぼす壓力が加はるであらうと評したのは、微妙な力の關係を明かにしたものであると共に、イギリスの憂慮と彼の眞意が奈邊にあるかとを示したものであるといふべきである。

イギリスに就て最も普通に考へられることはアメリカ、フランスを誘つて防共ブロック牽制の外交的活動を起すであらうことである。さうしてそれは必然に日本に對して好意あるものとは解されないといふことである。

反對に、イタリア、オーストリア、ハンガリー、フランコ將軍の革命スペイン、ブルガリア、ギリシア等は逐次此の條約に參加する可能性がある。

去る七月成立した獨墺協定は、オーストリア・ナチスのドルフス首相暗殺事件後のドイツとオーストリアとの關係を調整し、兩者の完全なる協力の可能性を明かにしたものであると同時に一九三四年並に本年のローマ議定書を以てオーストリアと共に三國同盟を形成して居たイタリアとハンガリーとをドイツに結び付ける楔となつたものである。

既にイタリアでは杉村大使とチアノ外相との間に協定參加の交渉が開かれて居る。尤もイ

リスが早くも參加阻止の勸告を爲し、グランヂ大使と折衝を開始したとの報道もあり、イタリアとして多少躊躇すべき理由がないではないが、結局參加するであらう。何故ならば、去る十月二十五日ヒツトラー總統と會見した伊外相チアノ伯は聲明を發表したがその第五項に於て次の如く言つてゐる。

『歐洲の社會組織を脅威する深刻なる危險に對しヒ總統、ノイラート外相及余チアノ伯は歐洲文明の神聖なる遺産を全力を盡して防衛すべき兩國々民の確固たる決心を確認したり』

スペインも革命政府は直ちに參加するであらう。尙又、最近右翼化したルーマニアが或は急回轉して加入する樣なことになるかも知れないが、現在はソ聯及びフランスと密接な關係に在り、小協商を離脱することは容易ではないと思はれる。

卽ち、以上の概況から見て、一方にソ聯邦と、之と利害を同じうするフランス及びその一統とも云ふべきチエツコ、ユーゴー、ルーマニアの小協商とが一つのブロック的存在を示し、他方ドイツ、イタリア、オーストリア、ハンガリー等の反共ブロックが之と對立し、イギリス、ベルギー等が中立的立場に據りつゝ多くフランスに好意を示す態度を執ると云ふ形勢が生ずるであらう。

一〇、協定の利害と將來

協定の將來に就ては、結局前記の如く、伊、墺、匈、西の四國は確實に參加するであらうし場合に依つては、更に二、三の國の參加を見ることになるであらう。從つて、此の協定を中心とする世界の防共ブロックは相當强大な勢力となるものと云ふ事が出來る。

同時に、之に反對する何等かの形に於ける勢力の協合が出來るかも知れないことは考へて置かなければならない。

兎も角も協定は今後五ケ年は有效であり、五ケ年は之を繞つて大きな國際的動きがあるであらう。が實際に於て協定の效果を凡ゆる部面に及ぼすものは、協定そのものゝ存在ではなくして協定が成立したといふ精神的な力の動き方、日本とドイツ、及びイタリアその他の諸國が一つに集り得たと云ふ精神的な部面に在るのであるから、協定が捲き起すであらうところの國際的波紋は畢竟、この協定が各國に及ぼした心理的な影響に依つて左右せられるのであるから、協定の將來も、結局、かくして繼起されるであらう各國の動きに對して何程の力を示し、何程の障碍を爲すかに、その運命を托するものと云はなければならない。

然らばその利害如何。

日獨協定直接の利益としては、防共に大きな力と便宜とを得たこと、裏から云へばコミンテルンの活動をより多く牽制し制止し得ることが第一であり、ドイツの支那に對する支援なども漸次緩和されるであらうこと、ドイツ、イタリア等の諸强から滿洲國の承認を得るに至るであらうことなどは第二であらう。

然し第三の最も大きな利益は、ソ聯や支那が衝動を受けた事實そのものが語る協定の精神力であり、日本は孤立無援、全く獨往の國際的地歩に、强大なる精神的協力者を得たことである。

次に害の方に就て云へば、ソ聯が露骨に示した前記の對日外交の如きはその第一であり、今後恐らく漁業條約等の外交々渉に於ていや味な外交を經驗しなければならないであらう。

第二は、英、佛を驅つて或は反日的立場に立たせるであらうと思はれる點で、此の點は見る人に依つて非常に重大であると評價されて居る。

外交當局は次の樣な見解を取つてゐる。日獨協定は、本質的には、イギリスの對日關係に對して何等の影響障碍も與へるものではない。唯一時の誤解が若干の疑感を生むかも知れないがそれは軈て解消すべきものである。殊に防共の點に至つては、元來イギリスが最も熱心なる主

唱者であるから、日本の防共そのものに對して反對すべき何等の理由も有たない。

それ故、日英關係を改善調整すべき日本の意向とその可能性とは毫も變動がない。

だが、今日までの日英關係は、果して一部の人々が同盟の復活をさへ翹望する程好調なものであらうか。此の點甚だ疑問である。日本がイギリスと協調すべき歐洲問題といふものはない若しありとすれば、それは主として太平洋面に關するものである。

然るにイギリスは支那に對して如何。昭和十年秋に於ける幣制改革に對する態度は決して日本に對して友好的なものであつたとは言へない。這般の日支交渉の間に於ける英國の態度も同樣、日本に好意ある仕打ちとは言へなかつた。

さうしてそれ等は總て一つの根本的な事實、即ち支那に於ては日英の利害は協調的では有り得ないで、寧ろ烈しい競爭的なものであるといふ不幸なる事實に基くものである。若しそれが日本の對北支政策の結果であるといふならば、北支政策が支那との話合ひ、支那の深い理解に依つてのみ調整が可能であると云ふ不可能を語るが如き事情から發したものであり、イギリスがかゝる事情に對して何等洞察的な理解を示さない點に於て、イギリスの對日關係を今日以上に是正するの途はないと云はなければならない。

それを打開することは不可能に庶幾い事である。とすれば、それは防共協定の存在と否とに係はりはない。といふことが出來るのである。言ひ換へれば、どの途、英國は米國を道連れにして日本を抑へやうとする肚であることに變りはないのである。防共協定がないからと言つてイギリスが、又アメリカがお互ひに他を棄てゝ日本の發展に双手を擧げるとは思はれない。

一一、協定は國際政局の樞軸

何れにせよ、日獨協定は今後の國際政局の動きに對する一の大き樞軸となつたことは爭はれない。從つて日本はその一翼に座して、國際政局の廻轉に依つて生ずるであらう快風、颱風の當りを從來より一層強く受けることゝなつた事は明かである。

それは次の二つの理由からである。

第一、『コミンテルン』の活動が之を機會に萎縮退嬰すれば比較的問題は尠いであらう。然し乍ら、それは殆んど豫想することの出來ない所で、恐らくはその活動が無理な形を取つても激化するものと思はれる。

第二は、防共協定が醸し出す防共ブロックの國際的意義である。即ち之に加盟すべき歐洲諸

國は獨、伊を始めとして、孰れもヴエルサイユ體制を打破して新なる基礎の下に新なる平和體制を創建せんとする、現狀打破派であり、從つて協定の目的こそ防共であるが、その顏觸れから與へる印象は現狀打破派のブロックであると云ふことである。

さうしてこのブロックに、同じく極東の現狀打破派たる日本が、はる〴〵極東から一枚加つたのであるから、之がブロック外の諸國に與へる心證は決して生易しいものではない。そこにブロックの國際的意義の重大さがある。

協定が今後の國際政局の樞軸となるであらうといふ意味であり、われ〳〵の重大關心が有たれる所以である。今後一兩月以後の國際政局の動きは微妙且つ重要な暗示を有つであらう。

（十一月二十七日）

◇編輯だより◇

◇突如として發表された日獨防共協定は對立する世界のブロックの一つへ日本を投げ入れたものであつて、吾々に大きな衝擊を與へた。次いで日伊協定が進展しつゝあり、世界の二大對立はどこまで進展するか。其の結果はどうなるか？　大なる『今日の問題』である。

◇著者三島康夫氏はかつて時事新報政治部記者たりし人、慶應出身では異色ある外交軍事評論家である。

◇次回は長谷川了氏『世界に於ける赤露の暗躍』としてコムミシテルンの活動を詳述したもので、十二月中旬發行。

◇本社パンフレツトの特長は筆者が權威揃である。內容が新らしく充實してゐる。時局へ敏速に對應する。問題の捉へ方が刻々進展する時局にピツタリ合致してゐる。問題の眞相、事件の內容が詳述されて新聞でも雜誌でも分らぬことが書いてある。これ等の點で讀書界から絕大な信用と好評を得てゐます。

◇毎月三冊以上發行、全國驛賣店書店で發賣して居ります。賣品に品切れ、御不便の時は本社直接御申込み下さい。

◇毎月一回機關紙『今日の問題』を何人にも無代進呈。

日獨はなぜ同盟したか
No. 80
定價十錢
昭和十一年十二月三日印刷
昭和十一年十二月七日發行
著者　三島康夫
發行者　伊藤隆文　東京市芝區田村町四丁目十八番地
印刷所　三陽堂　青野印刷所　東京市芝區田村町四丁目二番地
發行所　今日の問題社
東京市芝區田村町四丁目十八番地
電話芝(43)三〇〇七番
振替東京五九七四八番
【版權所有】
東京鐵道局公認　鐵道保養會（鐵道各驛ホームスタンド一手販賣）
鐵道弘濟會・鐵道授產會
大取次
森田書房・富田報英堂
上田屋・東京堂・大阪屋號
新正堂（京阪神一手扱）
川瀨書店（名古）

◇今日の問題社刊行書目◇

陸軍パンフレット 經濟戰略・思想戰略 價一〇 送二
秋定鶴造著 政局はどう動く？ 價一〇 送二
阿佐隆夫著 景氣は廻る 價一〇 送二
野田豐著 株式界の前途 價一〇 送二
楠公研究會編 密寶大楠公の遺訓書 價一〇 送二
熊崎健翁著 運に乘る法 特二〇 送二
高橋是清著 處世一家言 價一〇 送二
藤田信道著 東京附近夏山の旅 特二〇 送二
野田豐著 投資・利殖の必携 價一〇 送二
永松浅造著 豐太閤の處世術 價一〇 送二
松下芳男著 林銑十郎と眞崎甚三郎 價一〇 送二
管原節雄著 陸軍の智腦九人男 價一〇 送二
金子堅太郎著 日本憲法の精神 價一〇 送二
松下芳男著 川島義之と渡邊錠太郎 價一〇 送二
小林順一郎著 軍部と國體明徵問題 價一〇 送二
小林知治譯 ジャクソン式强體健康法 價一〇 送二
三島康夫著 制裁下のムッソリーニ沒落か 價一〇 送二
松下芳男著 荒木貞夫と阿部信行 價一〇 送二
片倉衷郎著 日本はイタリーを支持して英米の壓迫に備へよ 價一〇 送二
長谷川了著 裏から見た歐洲の外交戰 價一〇 送二
村田孜郎著 北支獨立運動の眞相 價一〇 送二
林勇造著 政局線に於ける軍部の動き 價一〇 送二
天沖鄕翁著 蔣政權の行方と迫れる日英戰爭 價一〇 送二
小泉二十著 外交陣をめぐる軍部と外務省 價一〇 送二
久原房之助著 國體宣揚と重臣ブロック（絕版） 價一〇 送二
經濟問題研究會編 サラリーマンは何處へ行く？ 價一〇 送二
三島康夫著 日支衝突必然論 價一〇 送二
石山賢吉著 金持に學ぶ 價一〇 送二
高橋是清著 半生の體驗 特二〇 送二
藤原銀次郎著 產業日本の進路 價一〇 送二
野村京太郎著 軍部・官僚・政黨 價一〇 送二
逢田武著 どうすれば選擧違反にならないか 價一〇 送二

◇今日の問題社刊行書目◇

牧野元次郎著 人生金儲け修業 價一〇 送二
菅原節雄著 政權は誰が動かすか 價一〇 送二
長谷川了著 急迫せる日ソ關係 價一〇 送二
三島康夫著 日露再び戰ふか 價一〇 送二
永井三郎著 現代軍部論 特二〇 送二
矢野恒太著 人生學第一課 價一〇 送二
三宅一郎著 陸軍と內閣顚倒 革新政策早わかり 價一〇 送二
齋藤二郎著 ソ支共同抗・日戰 價一〇 送二
天沖鄕翁著 日ソの危機を探る 價一〇 送二
野村重太郎著 新官僚の陣容を語る 價一〇 送二
松下芳男著 宇垣一成と南次郎 價一〇 送二
三島康夫著 赤軍の全貌 特二〇 送二
永松浅造著 池田成彬傳 特二〇 送二
多賀壯一郎著 貴族院改革問題 價一〇 送二
牧野元次郎著 食ひはぐれなき人生 價一〇 送二
池上五郎著 實說二・二六事變 價一〇 送二
小林順一郎著 新經濟國策の提唱 價一〇 送二
黑川修造著 惑星久原房之助 價一〇 送二
齋藤二郎著 支那の正體を衝く 價一〇 送二
菅原節雄著 陸軍の巨頭を語る 價一〇 送二
片山哲著 無產黨は何を求むるか 價一〇 送二
小林一三著 產業は國營にすべきか 價一〇 送二
神田孝一著 軍部の國策全貌 價一〇 送二
喜多壯一郎著 英雄に何を學ぶか 價一〇 送二
布施利秋著 歐洲の不安とスペインの動亂 價一〇 送二
野村重太郎著 寺內壽一と肅軍の動向 價一〇 送二
木村青著 スペインの革命を語る 價一〇 送二
齋藤二郎著 支那怖るべし 價一〇 送二
原田忠夫著 滿洲移民は成功か失敗か 價一〇 送二
井上太著 日本民族の指導原理 價一〇 送二
管原節雄著 傑將・眞崎甚三郎 價一〇 送二
多賀喜逸郎著 增稅は脅威か福音か 價一〇 送二

◎既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は本社直接又は最寄寶店へ。
送金は振替又は郵便切手のこと。月報『今日の問題』『新刊通知』『直接購讀規定』御入用の方は御申出下さい

目下發賣中の新刊パンフレツト

全國各驛賣店・各書店・ホームスタンドにて發賣

神田孝一著 **軍部イデオロギーの新展開** 定價十錢 送料二錢

齊藤直幹著 **軍部の産業政策** 定價十錢 送料二錢

永井了吉著 **政黨亡國論** 定價十錢 送料二錢

伊達圭介著 **軍部の行政機構改革問題** 定價十錢 送料二錢

山崎靖純著 **排日の支那を視る** 定價十錢 送料二錢

伊達圭介著 **日本に何が迫るか** 定價十錢 送料二錢

喜多逸郎著 **增稅は脅威か福音か** 定價十錢 送料二錢

中野正剛著 **支那をどうする** 定價十錢 送料二錢

菅原節雄著 **傑將・眞崎甚三郎** 定價十錢 送料二錢

三島康夫著 **赤軍の新研究** 特價八十錢 送料六錢

齋藤二郎著 **支那をめぐる日ソ英米** 特價五十錢 送料四錢

鈴木茂三郎著 **日本財閥の解剖** 特價五十錢 送料四錢

今日の問題社 東京市芝區田村町四ノ十八 振替東京五九七四八番

◇今日の問題社・新刊と重版◇

齋藤二郎著 **支那をめぐる日ソ英米** 最高機關の機關を動員し最新の調査による情報書 定價五十錢 送料四錢

鈴木茂三郎著 **日本財閥の解剖** 日本の大小財閥の組織、内容、系統、人物を調べ上げた新研究の書 定價五十錢 送料四錢

三島康夫著 **赤軍の新研究** 赤軍に對する最近の調査研究の書として專門家、軍人必讀の書 定價五十錢 送料四錢

高橋是清著 **處世一家言** 是清翁が生前日本國民のために書き殘された處世上の切々たる訓話 定價三十錢 送料四錢

國防研究會編 **廣義國防論** 國防論を系統的に說明して日本現下の狀勢より國防の必要性を說いた書 定價四十錢 送料四錢

愛讀者サーヴイス

今日の問題社機關紙……豆新聞

月刊『今日の問題』を無代進呈！

——希望者はハガキで本社へ申込まれよ——

パンフレット愛讀者へのサーヴイスとして、本社では非常な犠牲を拂つて、毎月一回、新聞を發行して、希望者には何人にも無代にて送呈致します。時事問題の解説、ニユース、いろ〳〵爲めになる讀物をはじめ、本社の新刊通知、其他いろ〳〵な計畫等が滿載してあります。讀者欄を新設して、讀者の短歌、俳句、論文、感想文等を掲載發表し、自由論壇を設けて、意見を發表します。御愛讀と御利用あらんことを！

發行所　東京市芝區田村町四
振替東京五九七四八番　今日の問題社

森田醫學博士推奬

強腦強精　滋養強壯

オオコンリオン

何が彼氏をさうさせたか？　強精！　健康！

オオコンリオンは強力ホルモンと強力ヴイタミンADとの綜合による最新の製品にして、殊にヴイタミンの含有量は最上位である。實に本劑一粒は、驚く勿れ、鷄卵十五個、牛乳三升、普通鱈肝油三十五のVA含有量に匹敵する偉力を持つてゐる。しかも本劑は日本の土壤と常食物との缺陷を研究して製られた理想的營養劑として、各方面から『なる程これだ！　心から求めてゐた藥はこれだ！』と喜ばれて眞實に効目が實證されました。左の症狀のある方は勇敢に試用あれ、必ず其効目が判ります。

機能衰退。早老。中老。初老現象。動脈便化。血壓亢進。視力衰退。虛弱體質。神經衰弱。頭痛症。ヒステリー症。肺結核。肋膜炎。肺尖カタル。慢性氣管支炎。病後の衰弱。貧血症。陰萎。不感症。性慾減退。身體がダルイ。何となく弱い人にはメキ〳〵効目が分る。

◇定價　壹圓五十錢（四五粒入）三圓（百粒入）八圓五十錢（三百粒入）十三圓（五百粒入）

發賣元　東京市芝區田村町四の十八
振替東京五九七四八番　今日の問題社

◇割申込は前金。振替又は爲替にて本社直接に願ひます。送料不要。試藥文獻二錢切手三枚お送りの方に無代進呈します。

齋藤二一郎著　四六版、二百二十頁、清裝　定價五十錢（送料四錢）

支那をめぐる日・ソ・英・米

内容の一部

序説　極東の明日は雨か嵐か？
第一章　蔣介石の支那統一と日支關係
第二章　危險なる日ソ關係
第三章　抗日目標のソ支提携
第四章　支那をめぐる日英の抗爭
第五章　米國の極東政策と英國
第六章　急迫せる日支關係と邦人慘殺事件の眞相

極東に於ける日支の抗爭は宿命的である。いつかは衝突すべき運命にある。なぜか、國民政府の抗日政策と支那の排日教育の然らしむることはもとより、ソ支密約、英米の魔手、これらが抗日戰線をめぐつて如何に動いてゐるか？本書は、最近に於ける日支問題を、支那問題の權威たる筆者によつて書かれたものである。刻下必讀の書！

最新刊！　全國書店にあり！

（品切の節は本社へ直接御申込み下さい）

今日の問題社　東京市芝區田村町四の十八　振替東京五九七四八番

特別出版いよいよ出來！

鈴木茂三郎著　四六版・百六十頁・清裝　定價五十錢（送料四錢）

轉換期を行く日本財閥の解剖

この書は、二・二六事件以來、苦悶に喘ぐ日本財閥を俎上にのせて其の深部にメスを突き刺しての解剖書である。エグリ出された轉換期日本財閥の現狀を見よ！

著者鈴木茂三郎氏は、財閥の解剖にかけては其の右に出づるものなしとの定評ある權威者、其の會心の書だ。

本書中に書き上げられた大小財閥の機構、內容、系統、組織資本關係、その網の目に躍る幾多中心人物の系統　動靜、各種關係等を何人にも分るやうに解剖して餘す所なし。

本書は著者が再び財閥解剖に筆をとらぬといふて書いた名著であつて、財閥研究の唯一の參考、讀んで面白く、現代日本の資本主義の全機構が分る。

（全國各書店にて發賣中、品切れの節は本社直接申込め）

近刊　三島康夫著　赤軍の新研究　四六版・百六十頁　定價五十錢（送料四錢）

今日の問題社　東京市芝區田村町四番地　振替東京五九七四八番

330
644

パンフレット保存用 綴込カバー（十五冊綴込）

總クロース・金文字入
綴込用紐付・美麗　定價金三十錢（送料不要）

パンフレット愛讀者各位の御希望によつて、本社で綴込カバーを創案しました。

一組十五冊綴込みにて、上等のクロースを使用した堅牢なもので、美麗にして、體裁頗る良く、順次發行のパンフレットを綴込んで、保存して置くのに便利であり、書架に納めて立派な裝飾ともなり、時局に對するエンサイクローペーディアともなつて、各方面より大好評を受けて居ります。

希望者には實費にて頒布します。

——希望者は前金にて本社へ直接御申込下さい——

發賣元　東京市芝區田村町四
振替東京五九七四八番　**今日の問題社**